

# Ebstein-Barr ウイルス関連血球貪食症候群が疑われた一例

阪上 智史<sup>1)</sup> 近野 哲史<sup>1)</sup> 中出 多子<sup>1)</sup> 友田 幸一<sup>2)</sup>

1) 岸和田市民病院 耳鼻咽喉科

2) 関西医科大学 医学部 耳鼻咽喉科

Ebstein-Barr virus (EBV) はヒトを宿主としてB細胞に感染し、伝染性単核球症を引き起こすが、T細胞やNK細胞にも感染を起こし、EBV関連血球貪食症候群や慢性活動性EBV感染症を発症することが知られている。今回、我々の施設でEBV関連血球貪食症候群が疑われた一例を経験したので若干の文献的考察を加えて症例報告する。症例は16歳男性。主訴は全身倦怠感、発熱、頸部リンパ節腫脹・圧痛であった。平成22年3月25日に発熱・全身倦怠感が出現し、近医を受診。抗生剤を内服するも改善なく、精査・加療目的にて4月5日に当院を紹介受診となった。初診時、圧痛を伴う両側頸部リンパ節腫脹を認めたが、扁桃に明らかな炎症所見を認めなかった。採血にて白血球の上昇、異型リンパ球数の増加、血小板数の低下、肝酵素・胆道系酵素の上昇、可溶性インターロイキン-2受容体抗体の上昇を認めた。倦怠感強く、食事摂取も不良であったため、同日から入院加療とし、保存的に経過観察を行うこととした。入院後、補液のみで経過観察していたが、徐々に倦怠感、採血データの改善を認め、血球も徐々に改善傾向を示し、第19病日に退院の運びとなった。EBウイルス感染症は時に重症化することが知られており、重症化が疑われた場合には適切な早期診断及び治療が重要である。伝染性単核球症の経過中や、一旦改善した後も重症化を念頭に置いた診療が必要であると考えられた。